あなたたちの声は、私たちに確かに届いた　～　「北野小学校学芸会」

北野小学校長　丹羽　郁人

令和四年十月二十二日、舞台の上で、子供たちは、歌い、演じ、舞った。表現し、伝え、訴えかけた。全身で表現する喜び。相手に伝わる嬉しさ。達成感、そして、充実感。幕は下りた。あたたかい拍手。やりきった表情で舞台を降りた。「北野小学校学芸会」である。

子供たちは、学びを通して、様々なものを作り上げてきた。そして、練習を重ねるたび、子供たちは、大きく、大きく変わった。

棒読みの台詞は、やがて、自信に満ちた「演技」となった。

ばらばらの音は、やがて、一体感のある「演奏」となった。

味気ない材料は、やがて、味わいのある「作品」となった。

七月。学芸会を行うにあたって、その三つの目標を全校の教職員で再確認した。

1　言語、身体、歌、楽器演奏などで表現する楽しさ、素晴らしさを実感させる。

2　作品をみんなで創っていくという、表現的・創造的な集団活動の楽しさ、素晴らしさを体験させる。

3　平素の学習の成果を相互に交流させる。

改めて目標を見つめ直し、それが達成できたか自問してみる。できたと思う。

表現するって、楽しいなあ、それが相手に伝わることって、もっと楽しいなあ。その楽しさも、素晴らしさも北野小の子たちは味わえたと確信している。

一人でつくるのではなく、みんなでつくる。

みんなでつくるのは大変だ。考え方も、感じ方も、それぞれ違う。温度差だってあるに違いない。でも、でもね、一人でつくるのも楽しいけれど、みんなで力を合わせてつくり、それができたときにみんなで喜び合える。それはもっともっと楽しいなあ。それはわくわくするほど楽しいなあ。そう思ってくれたに違いない。

それぞれの担任は、目の前の子供たちの特性や発達段階を考え、悩みに悩んで題材（台本）選びをした。そして、そして一か月あまり、子供と共に歩んだ。作品の持つメッセージ性に重きを置いた。子供自身が工夫して創り上げていくことに重きを置いた。物語の読み取りの深さに重きを置いた。日本語の奥深さ、力強さ、素敵さに着目することに重きを置いた。重きの置き方はそれぞれの学年・学級で違えども、確かなことは、子供たちが大きな歩みを続けたことだ。

家で台本を読み直す。せりふの意味を見つめ直す。休憩時間に楽器の練習をする。どんな発声なら伝わるのか？どんな表情を見せるべきか？子供たちは、悩み、考え、時には立ち止まり、それでも、大きな歩みを続けた。そして、そこには、子供たちの変容・成長があった。

子供の成長がいちばん嬉しい。

そして、その変容・成長を我がことのように喜ぶ、北野小教職員すべての思いが、尊い。

子供が成長する。そして、経験の浅い先生たちも成長していく。

すべての子供にスポットライトを当て、子供とともに完成を喜ぶ北野小の教職員。

私は、誇りに思う。

それを教えてくれたのは、あなたたち、北野小学校の子供たちにほかならない。

（二〇二二・一一・一〇）